

教 會 會 報

復刊第 25 号

知恵ある人の教えは命の“いづみ”である。(箴言13章14節)

編集・愛宕町教会・総務部 発行者・北 紀吉 発行所・甲府市北口 3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyousai/>

群衆の一人が言つた。先生、わたしにも遺産を分けてくれるよう兄弟に言つてください。」イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持つしていても、人の命は財産によつてどうすることもできないからである。」それから、イエスはたとえ話をされた。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは『どうしよう。作物をしまつておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言つた。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こゝ自分に言つてやるのだ。』さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。しかし神は、「愚かな者よ、今夜お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いつたいだれのものになるのか」と言われた。自分のために富を積んでも、神の前には豊かにならない者はこのとおりだ。」

蹴するのです。もちろん主イエスは、眞実で公正な方であり依頼の件などたやすく処理できるのです。しかし、主イエスは依頼する者に対しても眞実で公平な方です。そればかりか、この人の問題は、すべての人の問題であると見抜かれるのです。主は、そこにいるすべての人(一同)に言ってくださいます。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」と。

それゆえに、主イエスは、豊かさにより頼んで大丈夫と思つた金持ちのたとえをお話くださいましたのです。金持ちとはいっても畑が豊作だというのですから、この金持ちとは大土地所有者だということが分かります。今まで持つていた倉では納めきれない大豊作に、どうしようと思ひ巡らした挙句に、「こうしよう」と、倉を壊して、もっと大きいいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言つてやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができるだぞ。ひと休みして食べたり飲んだりして楽しめと』。一生働かなくても良いほどの財産があるとは、うらやましい限りです。

しかし、そうではありません。自分の命を財産で保証できま

汚染・処理にも拘らず、尚、原子力を推進したいと思う人々もいて、どうしてか?と思つたりします。これまた、原子力依存症と言えば分かるようと思えます。救いでないものに依存している「人の救いがたさ」を改めて思います。

救いは、命の源なる神にあります。神こそが、命をつかさどっておられるのです。人に命を与えるのも取られるのも神です。命の保証は、ただ神にのみあるのです。主イエス・キリストをもつてして私共の罪を贖い、永遠の命を与えて下さる神にのみ、より頼む、そこに救いがあります。依存症でしかない私共、故に、ただただ、命なる神により頼むほかありません。

自分の分を分けてくれるよう調停してほしいと思ったのです。が、その思いに主イエスは人の貪欲を見たのです。人は、ものに捕らわれます。しかも、自分のものなのに他人が奪つていて、と思うと、失つたものに一層執着します。主イエスは、物に捕らわれている人の思いを知つて、救い出すために、「一同の者に「貪欲に注意」と言つてくださいましたのです。主イエスは、人の物欲を満たすためにおいでくださいさつたのです。人々を、そして、私共を神へと至らせるためにおいでくださいましたのです。

自分の分を分けてくれるよう調停してほしいと思つたのです。が、その思いに主イエスは人の貪欲を見たのです。人は、ものに捕らわれます。しかも、自分の中のものなのに他人が奪つてゐると思うと、失つたものに一層執着します。主イエスは、物に捕らわれている人の思いを知つて、救い出すために、一同の者に「貪欲に注意」と言つてくださいました。人々を、そして、私共を神へと至らせるためにおいでくださいたのです。

★

それゆえに、主イエスは、豊かさにより頼んで大丈夫と思つた金持ちのたとえをお話くださいました。金持ちはいつても畑が豊作だというのですから、この金持ちは大土地所有者だということが分かります。今まで持つていた倉では納めき

ると思うのは妄想です。富に依存して自分はもう大丈夫だと思ふ金持ちに、神は、「愚か者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いつたい誰のものになるのか」と。人は、何かを手にしていなければ不安です。それほどに何かに依存したいのです。今や、私共日本人は、経済活動を第一としています。そんな経済第一主義を揶揄して金本位主義と言つたりします。要は、お金依存症にかかるのです。依存症に自力による救いはありません。お金ばかりで車社会、言葉を変えれば車依存症です。近頃では、人の手には負えない放射能汚染・処理にも拘らず、尚、原子力を推進したいと思う人々もいて、どうしてか?と思つたりします。これまで、原子力依存症と言えば分かるように思えます。救いのないものに依存している「人の救いがたさ」を改め



思えます。

受洗を決めた時、北先生から「自分を大切にするという事は、自分の周りの人、自分のいる環境を大切にする事だ」と、「隣人を愛する」事について教えて頂きました。これからは、日曜礼拝や、学校で行われる毎朝の礼拝を通して聖書を学び、神様のめぐみに感謝する生活を送りたいと思います。

私が生まれた年に、阪神淡路大震災がありました。そして今日本大震災が起り、多くの命が失われました。私は今、命について考えます。神様から与えられた命を大切にし、その命を自分でのために使うのではなく、どう活かしていくか、聖書の御言葉を頼りに考えていました。(二〇一一年四月二十四日、イースター礼拝にて受洗)



## 転入会しました

### 転入会しました。



土橋 春美

二〇一〇年九月十二日、私は市川教会から、親しみ深かつた愛宕町教会に、北牧師先生及び役員会の方々、敬愛する兄弟姉妹の皆様の温かいご配慮を頂き、教会員として転入会を許されました。

間もなく一年、主の導きと恵みに満ち溢れた聖日礼拝、そして心温まる深い交わりのこの教会に導かれた道程を思いますと、感謝の念でいっぱいになります。

私の信仰は一九四九年頃に出発したように思っています。当時私は中学生で、父親の赴任先であった身延町に家族と共に住み、町の中学校に通学していました。身延の町について少し触れますと、この町はご存知かと思いますが、日蓮宗の總本山「身延山」の門前町として発展してきました。山間の谷川に沿うよう宿坊や旅館が建ち並び、四季を問わず白装束に身を固めた信徒の列が駅頭に並び、「本山」を往復するのが日常の風景でした。

一九五一年頃、多くの列車が全國から人々を運んで来るこの町にも、やがて福音の知らせがもたらされる時が訪れました。主を待ち望む者は新たな力をえん、また鷺のごとく翼を張りて昇らん、走れども疲れず、歩めども倦まずるべし。

日本基督教団市川教会の家庭集会が、市川教会員の磯野様ご夫婦(山本幸子姉のご両親)のご好意で始められ、市川教会の山口牧師の牧会と教会の兄弟姉妹の応援も加わりスタートいたしました。聖書交読、讃美歌の合唱、何もかもが新しい世界で、戦後の混乱の時代に別れを告げ、自由と希望が集会に満ち溢れるようでした。

この集会に鈴木顯栄先生も出席されたことがあります、「詩篇の交説」をされました。黒ぶちの眼鏡をかけ、大柄の体型で、何よりも朗々たるお声で讃美歌を歌われ印象的でした。今ご縁のあるこの教会に導かれるとは、當時は思つてもみないことでし

た。

しかし、宣教師の方は三年の任期があり、来日三年目には新しい人が交替し、言葉の問題や日本の生活面の相違は苦労が多く大変な時代でした。特に教会員は、聖研を続けるため良き指導者を望みましたが、叶いませんでした。

家庭集会は教師、学生、婦人会の方々、多くの人が集まるようになり、駅に付属する集会場で日曜午前にCS、集会は夕礼拝になりました。市川教会の兄弟姉妹の応援もありました。兄弟姉妹の応援もありました。一九五四年十二月にはCSの子どもたちと共にクリスマス祝会を行い、子どもたちの聖書物語の寸劇、讃美歌の合唱、人形劇など楽しい祝会で、近所の人々も参加し、教会活動が確実に定着して来ました。

一九六一年、私の家では父の転任に伴い、家族は神奈川県に転居することとなりましたが、その年、私は主人に嫁ぐことが決まりました。主人の母上は市川教会員で、若い頃は生家の兄弟姉妹と教会に通い受洗、主人になる人もCSで幼い頃を過ごし、同じキリスト者として「よい道ではないか」と、両親も勧めました。久しぶりに再会した

2011年8月28日

市川教会の山口牧師先生は「あなたでしたか」と、本当に喜んでくださいました。

結婚後は、子育て、主人の転勤、母の発病と介護、二人の子どもの進学・独立と、時は過ぎ去つていきました。

二人の子どもがかつて東京、札幌と勉学の道を選んだ際、私は自分の愛唱する冒頭のイザヤ書四〇章のこの聖句を、迷わず子どもたちに聖書と共に贈りました。憐れみ深き神は二人の子どもに、各々勉学の地での礼拝の場も備えてくださいました。

そして、幾度となく熱心に教会の礼拝に、チャペルコンサートにと誘い続けてくださった幼友達の山本幸子姉、転入の日「神様のお導き!!」と喜んでくださいました。

本当に主は、私の「支配者であり、さときこと測りがたし」と、心から信頼を申し上げ、感謝を捧げたいと思います。

(二〇一〇年九月十二日、  
主日礼拝にて転入)



## 転入会しました



### 『ご恩寵の下に』

宮崎 基和

二〇一〇年十二月十九日、愛宕町教会のクリスマス礼拝に転入が許され、感謝致します。

私は東京の下町生まれ、山の手育ちで、学歴は根岸の幼稚園・小学校を経て市立上野中(二中)を経て、品川区に転居のため、高輪中(泉岳寺の隣)に転校、終戦の年、第一早稲田高等

学校を経て、理学部応用化学科に進み卒業後、醸造会社に一時勤務のため、藤沢市鵠沼海岸に転居、昭和三〇年に親戚の者の勧めもありミッショングスクールである青山学院高等部(渋谷)に理科教師として転職、学校では毎日、礼拝の時間があり、生徒と共に

守つて参りました。その後、結婚して杉並に四年、その私が縁もゆかりもない甲府へ平成十二年末にそつくり転居、今では自分の故郷にでも帰つたような気分になつていてから人生不可思議なものです。盆地をぐるりと一望できるマンション十六階のベランダに立て甲府城跡や街並を眺めたり、美しい富士山、南アルプスの山々を眺めると童心に返つたようになつてきました。

子供の頃から自転車を愛用していましたので、市内あちこち出かけるのを楽しみにしていました(車は運転しませんので)。ところが、二〇〇九年十一月、自転車の転倒事故を起こして左大腿骨転子部骨折の大怪我をしてしまい緊急入院・手術・リハビリという、人生の晩年が思ひがけないことになつてしまつたのです。

受洗は一九六〇年、杉並区にある日本基督教団大宮前教会にあります。茂牧師より授けて頂きました。子供がありませんので、家の両親と同居し、一家が信者でしたが、神様の前には常に懺悔と赦しを乞わなければならぬ老夫婦です。

こんな老夫婦を神はお見捨てなく愛宕町教会員の皆様の温かい慰めとお励ましの中に置いてくださっています。どうぞ今後とも宜しくお願ひ申し上げます。リハビリ頑張つて礼拝に出

主にお招きとお導きにより、

この度愛宕町教会に主人共々転入が許されましたこと、心から感謝いたしております。

宮崎 美千代

席できるよう祈つております。

### 『主にみちびかれて』

主にお招きとお導きにより、

この度愛宕町教会に主人共々転入が許されましたこと、心から感謝いたしております。

私は一九三四年、祖父母、両親と信仰を継承するクリスチヤンホームに生を受けました。

しかし、その誕生は生後すぐに結核に感染し、おそらく一歳の誕生日は迎えられないだろうという厳しい人生のスタートでした。その後、病との闘いが続きましたが、神様は現在七七歳という長い年月を生かしてくれました。

しかし、いつも神様は共に歩んでくださっています。そして尊かれた愛宕町教会は祈りの集団として紳の強い教会でした。他者に対して温かく優しい教会員の皆様にお交わり頂き、身障者として晩年を生きる主人をいつも案じてくださることに心から感謝いたしております。

私がこの山梨の地に参りましたときさつは、一九七一年に日本で初めて開設されたボランティアによる電話活動「いのちの電話」を山梨にも開設したいとの協力依頼があつたためです。「東京いのちの電話」「東京多摩いのちの電話」「山梨いのちの電話」と四〇年間に三ヵ所での開設準備を致しました。そして現在は、山梨県警察本部からカウンセラーとして委嘱され、性犯罪にあつた若い女性の心のケアにあたっています。神様は七七歳の私を生かしてくれました。よく生きてこられたと思いました。よく生きてこられたと思

う。よく生きてこられたと思

う。よく生きてこられたと思

う。よく生きてこられたと思

う。よく生きてこられたと思

ていてくださいます。

これからも、この老夫婦をどうか宜しくお願ひ申し上げます。主の御名を贊美致します。

クリスマス礼拝にて転入)

転入会しました



河野和彦・光恵  
今年の四月に夫婦して転入を  
許された河野和彦・光恵です。  
私にとつては母教会に戻つてしま  
たことになります。それまでは  
東京・町田ベテル教会の礼拝に  
出席しておりました。

大学を卒業すると東京のある通信社に就職、世田谷区にある代田教会に出席するようになります。その後 転居や転勤になりました。伴い神奈川県の藤沢北教会、大阪府の北千里教会、そして町田阪府のベテル教会の礼拝へと、礼拝を

向き、荒川の河原で祈祷会を持ち、昇仙峡から流れ出る清流の中で講師の森山諭牧師、鈴木顕栄牧師の力強い腕に身を任せてジャブンと洗礼を受けました。水を飲んでしまった姉妹もいました。

翌年には崖縁の小径にそつた民家に立ち退いていただき、その跡地に新しい教会堂が与えられました。

座までの移動ですが、私はすくにしごれをきらして体を動かしながら説教を聞いていました。

した。中央線石和駅まで約六キロの砂利道を自転車で、坂道なので朝は二〇分、帰りは四〇分の行程です。電気機関車が牽引する客車のデッキに捕まつて甲府まで通うのです。

甲府駅の北口から三念坂を上り、英和学園の講堂わき、さら

中心とした信仰を守られてきました。怠惰な性格をご存じの神様は、いずれも住居から近くの教会へと導いて下さいましたけれど母教会である愛宕町教会だけは、受洗のときも現在も少し遠いなど感じていますがでも車で片道三〇分余です。

妻の光恵は、私が就職して上京し最初に代田教会へ出席した四月一日がイースターで、その日に小川治郎牧師から洗礼を受けています。恵泉女学園の中学校から高校へ進学した年です。残念ながら私はその時の情景を覚えていませんが。

小川文庫夫妻

人の歩む道は主の御目の前にある。その道を主はすべて計つておられる。

2010年6月24日 祈祷会

証詞・感話



古屋 律子

「自分を正しいと思つてゐる人は、救い主を求める。主イエスは、誰がご自分を必要としているかをご存知。だから『見ていて』くださる。人々に蔑まれながら収税所に座らざるを得ないマタイを、主イエスは見かけてくださいた。マタイも知つてゐる。自分が罪のただ中にあり、その日常から抜け出せないことを！ 罪のただ中から抜け出せない人、マタイを見てくださった主イエス。その主が声をかけてくださつた。裁きとしてではなく、招きとして。神の救いを必要としている者として。その主の御聲を聞いたマタイに、主に従うことの理由などない。神の救いを見た、知つた、だから従つた。主イエス

の眼差しは、罪人にこそ注がれる。憐れみの神の眼差しの中で、マタイは救われたのだ。この御言葉の解き明かしに、十字架の主イエス・キリストの眼差しが、罪深いこの私にも注がれたことを思い感謝でした。

私の人生にとつての第一の転機は、大学での主人との出会いでした。知り合った時、既にキリスト者だった主人ですが、当時は教会生活から離れておりました。けれども結婚することになった時、主人は「結婚式だけは教会です。俺は洗礼を受けているから」と言いました。主人は「洗礼を受けているから」と言いましたが、教会へ行っている様子も無かったので、「クリスチヤン」と言わっても何の実感もなく、しかし「洗礼を受けている」ということには、何か決して変えることのできない、持つて生まれたもののような重さを感じて、その時には、信仰について深く聞きませんでした。

一九八四年四月二九日、愛宕町教会で結婚式を挙げていただきました。結婚当初は義務的に礼拝出席していましたが、月日を重ねるうちに、せっかくの日曜日に何故教会へ行かなければならぬのか、何故奉仕に誘われるのか、何故献金をしなければならないのか、段々と疑問になりました。やがてそれらは諸々に対する「不満」となりました。また、何故主人は聖餐を受けるのか。「相応しくない今まで聖餐を受けることは主の体を汚す」と言っているのにも拘らず、とても相応しいとは思えない主人が平気で聖餐を受けているのは何故か。私は主人を「偽善的、八方美人」と感じ始めました。

信仰は失つたはずなのに教会から離れられない主人。教会は何でも許す所かもしれないけれど、だからと言つて、許されていることに甘えていた姿。そんな主人に「何といい加減なこと」と、私は怒りを覚えました。私はと言えば、あまり挫折を経験せずに成長し、大人受けする「良い子」と言われて久しく過ごし、頭でつかちな高慢な娘で、「自分は正しい」ことが当たり前、何でも白か黒、まさしく律法主義そのものの姿です。

「教会のこと」以外では何も折り合わないことは無かつた私たちですが、教会に対しても曖昧な態度の主人を、私は責めるばかりでした。そして「教会・信仰」だけが、主人と私を隔てる大きな壁であるように思え、何か得体の知らない私の世界が主人の心の中にあることが、私にはとてもショックでした。

ある時、私は「教会に行くか行かないか、はつきりして」という決断を主人に迫りました。今にして思えば何と心ない罪深いことでしょう。主人は、人間的な愛の故に「教会へは行かないことにする」と言つてくれました。ところが、「教会」へ行かなくなつたにも拘らず、私は、それが実は「主人の本意ではない」ことを感じ、また気に入りませんでした。表面的に私に合わせているだけ、この人の真実はどこにあるのか。神の愛を知らない私は、人の心に真実の愛を求め、また自己中心な自分の愛を押し付けるばかりです。好意という愛を受け取ることも出来ない傲慢さと、同時に「私に寛容さがないために、上手くいかない」という後ろめたさとで、全てに行き詰まってしまいました。

ある日、虚しい思いの中で、ふと聖書の御言葉を思い出しました。御言葉など知らない私は、どういう訳か「コリント13章」と思つたのです。それで早速、聖書を開き、とても驚きました。そこには「愛」について書かれています。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない…」そこに記されている「愛」は、どれ一つとつてみても私が主人を愛する愛とは全く違つて、いや、私の持つている愛の中に見出せない「愛」の姿でした。

私は、どうしても、この「愛」について知らなければならぬと思いました。それには教会に行く以外ありません。居ても立つてもいられない気持ちで、主人に「次の日曜日には教会に行きます」と宣言しました。まさしく「わたしに従いなさい」との主の御言葉に、なんのためらいもなく従つた徴税人マタイの姿そのものです。救いを必要としている者に目をとめ、招いてくださる主イエス・キリストの贖いの恵みが、聖霊の出来事として、この罪深い私にも臨んでくださったのです。

それからというもの、御言葉を求めて礼拝・祈祷会を守り、ほどなく一九八七年クリスマスに洗礼の恵みに与りました。顧みて今、罪の極み故に神の憐れみをいたしましたこと、十字架の主イエス・キリストの贖いの恵みにいたしました。吉田教会が属する教団内ホーリネスの群れの集会が淀橋教会で開かれるということで「第二回ホーリネス・キリストの福音宣教大会」が開催されました。

2010年10月28日 祈祷会

### 証詞

## 主の憐れみの中に 生かされて



雪江 美也

『ローマの信徒への手紙 第9章16節』

私はクリスチヤンホームに育ちました。父と母の出会いは、婦人会、壮年会の皆様のほうが良くご存知だと思います。私の場合は信仰による導きがなければ今こうして、ここにいることはなく、最初から神様の導きの中にあつたのだといえるのだと思います。

私はクリスチヤンホームに生まれたわけですが、その後大きな試練が我が家を襲いました。私が二歳半のとき、家のなかで遊んでいる時に熱湯を肩口から全身に浴びてしまふという出来事が起きました。全身の三分の一近くかなり深い重度のやけどを負つてしまい、生か死かのところをさまよいその後半年ぐらい入院生活を送りました。二歳半の子供にとつては致命的なものでした。父母の必死で真剣な祈りが聞き入れられたのだと思いました。足がパンパンになるほどペニシリソの注射をしたと聞いています。五〇年も前、今ほど治療方法がない時代に良く助かつたものだと思います。今は天上にあつて主のもとにある多くのかたの祈りに支えられ生かされたのだと思います。火傷のあとは今でも残つております。

この火傷跡は私の人間形成、性格形成に大きな影響を

与えました。高校二年の春、当時（母の母教会）富士吉田教会が属する教団内ホーリネスの群れの集会が淀橋

教会で開かれるということで「第二回ホーリネス・キリストの福音宣教大会」が開催されました。

ティバル」に参加いたしました。内向的な性格を心配した母のすすめであつたような気もします。夜の集会で「恵みの座」というものが開かれ、涙ながらに自分の罪を悔い祈つてもらつたことを今でも覚えています。

その年のクリスマスに鈴木牧師より、祖父母と同時に受洗の恵みに与りました。その後はますます聖書を読むようになりました。教会の高校生会も活発な時期で、今思えば周りの状況は恵まれた状態であつたと思いますが、自分自身は何か満たされないものがありました。その後、大学受験に失敗し浪人中のこと、祈りの中で与えられた言葉が「ただ憐れみによる」(ロマ書9章16節)というみ言葉でした。み言葉に打たれたというような感じでした。すべては主の憐れみにより生かされているのだということが本当にわかりました。救いの確信が与えられました。当時使用の聖書のこの箇所には「一九七九年八月十二日」という日付が印されています。

大学時代、東京で就職している時期、振り返るといろなことがあります。一生を通じての信仰の友が与えたことを感じています。一生を通じての信頼が与えられたのもこの時期でした。その後二〇年、店の跡を継ぎ、結婚、子供の誕生・成長、母の闘病・召天、バブル期をはさんでの店の盛衰、特に三年前の夏、父が体調を崩し家業である時計の修理が不可能になつてしまい店の経営方針を根本から考えなおさねばならない時期がありました。突然でしたが経営の全責任を負わねばならなくなつてしまいどうしたら良いのか本当に悩みました。その中で一番大きかつたことは「祈る」ことが出来たことでした。本当に神様にすべてをおゆだねするしかありませんでした。父のことも今思えば神様の大きなご計画のなかにあつたように思えます。いろいろな状況を考えると経営の交代はこのようなかたちでなければ出来なかつたと思います。

神様は厳しい状況の中、最善のものをお与えくださつておられるのだと思います。今までのことを振り返つてみるとその時その時に本当に最良なものが与えられています。祈りつつ行動し神様にすべてをおゆだねする、これしか方法がありません。

地上にあつた時の母の祈りも聞かれていると思いま

す。地上での祈りは決して無駄なものはないと思います。これからも主の導きがあることを信じ家族のことも祈りつつ歩んでゆこうと思います。また、小池牧師がよくおつしやつていた「神を侮るなけれ」と言う言葉も常に忘れないようにしたいと思います。

主の憐れみのなかに生かされていることを主に感謝しつつ、つたない証を終えたいと思います。

## 2010年12月23日 祈祷会

### 証詞

## 顧みられていた私



石橋 一芳

一九八一年四月下旬、当時二〇歳の私は甲府市内のある病院のベッドにいた。ひどく暗く重い気持ちを抱え、窓を開ければ青空が広がっているのに、空は青いと感じられない。

オートバイで転倒し、前歯十二本を失った私は青空を見ても心は鉛のように重く黒雪のように暗かつた。

五月に入り一週間が過ぎようとしていた頃、病室に父の妹夫婦が見舞いに来てくれた。叔父は私に「一芳の気持は俺には分かる」と言う。しかし私は、「叔父には分からない、分かるわけがない」と言葉に出さぬがそう思った。叔父は話し始める。戦時中戦闘機の整備をしている際、力をこめて握ったスパナはボルトを外れ叔父の前歯を折った。数本失われた歯はその後年月とともに姿を消し、今ではすっかり無くなつてしまつたと言い、顎から義歯を外し私に見せたのであつた。

ああ、叔父には私の心のあり様が解かっていたのか。この無念さ、悔しさ、その真つ暗な胸の内が。その時を境に私の心は次第に明るさを取り戻していく。

礼拝が終わると、十二名程度の小さなキリスト者の群衆は、各自が持ち寄ったお弁当を開きながら温かく私を迎える。黒田牧師と老婦人が「この兄弟に信仰が与えられる様に」と、心のこもった祈りを捧げてくださり、言葉に飾りはないが、心が整えられ力が与えられるのを感じた。

その後三ヶ月の山形での出張を終え、甲府に戻ることになる。甲府に帰つたら愛宕町教会へ通うことを勧められ、それから愛宕町教会に集わせていただいている。私は障害がある。子供の頃は先天性股関節脱臼で堅いギブスを腰に付け、四歳近くになつて歩けるようになった。

もう一つは左眼の筋肉障害でデュアン症候群という病気であった。左眼はこれまでに三度の手術を受け、現在の生活に支障がない状態を保つていて。

歩けなかつたこと、左眼が思うように動かなかつたこと、前歯を失い失望していたことなど、どれも自分一人の力ではどうすることもできない状態にあつた。キリストは病む時も健やかな時も共にいて下さつたことを覚えます。

私は障害は残されているが、私は恵まれている。主の恵みは私に十分与えられて、今もこうして生かされている。キリストに従つて歩みを続けていけたらと願う次第である。

翌年の一月中旬、通信建設会社に勤めていた私は、会社の先輩方と共に山形県へ出張となつた。毎朝わざかな時間であつたが走るのが好きで、薄く積もる雪道をジョギングしている途上で小さな教会が目に留まつた。山形南部教会であつた。一度入つてみたいとの思いから、次の日曜日の朝、教会の扉を開けると「力の主をほめたたえまつれ」と讃美歌が聞こえ、受付の方に案内され礼拝堂の席に着くと、隣席の方が讃美歌のページを開き私にその箇所を示しながら歌われる。大学生と思われるオルガン奏者に合わせ、高齢の方、高校生が、主に向かって歌つておられた。初めて触れた讃美歌、そして聖書であつた。

## 2010年度夏期伝道実習報告

## 感謝

東京神学大学大学院1年

濱田 真喜人



愛宕町教会の皆様が、夏期伝道実習生として受け入れてくださいり、実習中も祈りと励ましをもって支えてくださったことを心から感謝いたします。

この夏、愛宕町教会で皆様と共に礼拝をし、日々を送れましたことは、神さまからの贈り物であると信じています。

実習を通して本当に多くのことを考えさせられ、学ばせていただきました。このことは、私が将来牧師として立っていくための、他に換えることのできない宝となるはずです。

祈祷会、家庭集会を通して、「み言葉に聴く」とは一体どういうことなのかを身をもって学ぶことができました。北先生をはじめとして、皆様の質問、意見、批評をいただく中で、自分がいかに聖書の言葉を曲げて、自分に都合の良いように理解しているか、知らされました。それは逆に言えば、聖書のみ言葉の一つひとつが本当の意味で「聴かれる」とき、そこにどれほど恵みがたたえられているかを学ぶことでもありました。実習の間中、み言葉を曲げてしまう自分。聖書に聴くことができず、はじめから頭でばかり考えようとする情けない自分の姿と向き合わねばなりませんでした。こんなことで本当に牧師になどなれるのだろうかと思わずにはいられませんでした。

けれども、もう自分の力や、理解に頼ることができなくなるとき、もう祈って聖書を読むしかなくなるとき、そこに光を見ることができたように思います。「み言葉に聴く」というのが、一体どういうことなのか、理解し、体験することができたように思います。

家庭集会の場で、意見をいただき、批評していただく中で、聖書の一つひとつの言葉にたたえられている恵みを、共に分かち合えたことは、何よりの喜びがありました。ある方が「家庭集会を通して、神学生と一緒に成長することができた」と言ってくださったことは、本当に神さまの憐れみによるものと感謝しています。

実習の全体を通して、本当に、北先生には多くのこ

とを教えていただきました。何の取り柄もない私に正面から向き合ってくださいり、いつも真剣に熱意をもって教えてくださいました。牧会、伝道について多くのことを考えさせられ、教えられる中で、自分が普段いかに何も考えずに漫然と過ごしていたかを思われました。聖書に聴き、目の前の牧会の現実や、社会・時代の現状と向き合い、理解し、明確に考え、判断する。「神学する」ということはどういうことなのか、大いに考えさせられました。

先生から学んだことは多くありますが、特に「牧師になるということは、配慮する側に立つことだ」ということについて考えさせられました。自分はこの点に関して大いに甘かったと思います。そして今でも、甘いことを否定することはできません。自分が普段からいかに配慮することを考えるのではなく、配慮されることを求めていたかを思いました。これから教会生活、大学での学びの中で、「配慮する者」になるべく、祈りつつ学んでいくことになるかと思います。

愛宕町教会は、聖書に真剣に向き合う教会であると思います。教会に集う一人ひとりの方から、そのことは感じ取ることができました。そして、兄弟姉妹を覚えて、よく祈る教会だと思います。私自身も大いにこの祈りに助けられました。

さらに、愛宕町教会は交わりを大切にし、中でも特に食べることを大切にし、神さまに与えられた恵みを味わうことを知っている教会です。愛宕町教会には子どもたちの輪があります。神さまの恵みに生きる子どもたちが育っています。大きな希望が愛宕町教会にはあると思います。

最後になりましたが、労を顧みず熱心に指導してくださいました北先生、励ましてくださった牧師夫人と家族の方々、いつも祈ってくれた教会の皆様、慰めを与えてくれた子どもたち（実習最終日にくれた子どもたちの手紙は、本当に宝です）に、心から感謝いたします。

皆様のことを覚えて祈ります。祝福がありますように。